

感情コミュニケーションの社会学と現代社会(8)

内 田 司

要 旨

現代社会における私たちの生活様式の諸特質の一つは、理性と感情が対立させられ、理性だけが重視され、感情（生活）の重要性が等閑視されてきたということである。というのも、私たちが生活している現代の市場経済社会では、私たちは、最小費用による最大の利潤追求、そのことを可能にする最適化と効率化、そして計算可能性という、近代合理性の経済化された生活原理が至上原理となった社会生活に、否応なしに適応しなければならなかったからである。こうした市場経済社会における経済様式化された社会生活の中では、私たちは否応なく自分以外の外的世界と、自己の私的（経済的）利益を実現するために、損得感情（勘定）にもとづいて、手段的・道具的にかかわらざるをえない。その中では、理性＝知性とされ、私的目的実現の手段として重視されるが、感情はそうした合理的な活動を攪乱する非合理的なやっかいものとして従属的な地位に押し込まれてきた。しかし、こうした感情生活を抑圧する社会生活は、諸個人の精神生活だけでなく、対人関係、対社会的関係行為にもさまざまな問題を引き起こしている。連載からなる本稿は、かかる現代社会における諸個人の感情生活の非合理的な存在様式によって引き起こされている、諸個人の精神生活、人間関係、社会との関係にかかわる諸問題を、感情コミュニケーションの視点から分析することを目的としている。本号の課題は、労働生活における感情コミュニケーション様式の特徴とそれが諸個人の精神生活に与える影響について理論的に検討することである。

キーワード：感情コミュニケーション、共感、損得感情（勘定）、疑心暗鬼のコミュニケーション、傲慢とルサンチマン、愛

目 次

序 問題の所在

第一章 社会・生産と生活の社会的諸組織・人間関係・諸個人の精神生活と行動・行為

第二章 理性と感情に関する理論（79号）

第三章 感情コミュニケーションの理論（80号）

第四章 現代社会における生活原理・社会関係原理と感情コミュニケーションの諸類型（81号・82号）

第五章 現代社会の社会変動と社会関係の変容、諸個人の精神生活の諸問題

第1節 現代社会における社会変動と社会類型

第2節 現代社会における生活諸領域の分節化と生活諸領域間の関係様式（83号）

第3節 現代社会における消費の場における生活・社会関係・個人の精神生活（84・85号）

- 第4節 現代社会における労働の場における生活・社会関係・個人の精神生活（本号）
- 第5節 現代社会における教育の場における生活・社会関係・個人の精神生活
- 第6節 現代社会における家庭という場における生活・社会関係・個人の精神生活
- 結語 「共感」に基礎をおいた感情コミュニケーションが豊かに発展する社会のあり方を求めて

第五章 現代社会の社会変動と社会関係の変容，諸個人の精神生活の諸問題

第4節 現代社会における労働の場における生活・社会関係・個人の精神生活 (市場経済社会における労働生活の社会的性格について)

前節までの現代社会における消費生活の場における私たち諸個人の日常生活場面における，個人にとっても社会にとっても問題を孕んでいると思われる精神生活の様式，およびその精神生活様式から生み出される，同じく個人にとっても社会にとっても問題を孕んでいると思われる行動・行為の様式を検討する課題に次いで，本節では，労働生活の場におけるそれが課題となろう。これまで社会諸科学の中では，市場経済社会における労働生活領域の社会的性格については，前節の検討対象であった消費生活領域のそれとは全く反対の性格を有するものとして把握されてきたと言ってよい。例えば，キーワードでその対比を試みてみるならば，消費生活領域の社会的性格が，（自己の意志にもとづく）自由・（契約的）平等・自己実現というように表現されてきたとすると，労働生活領域のキーワードは（他者の意志の下での）不自由・（支配・被支配関係という）不平等・自己の消耗（または貧困化）と表現されるであろう。

例えば，アダム・スミス氏は，自身の著書である『諸国民の富』の商品の価値を論じる中で，商品価値の「実質的尺度」⁽¹⁾としての労働を次のように性格づけしていた。すなわち，「あらゆる物の実質価格（real price），つまりあらゆる物がそれを獲得しようとする人に現実についてやさせるものは，それを獲得するための労苦や煩勞である。それを獲得して売りさばいたり，他の物と交換したりしようとする人にとって，あらゆる物が現実にとどれほどの値いがあるかといえは，それはこの物がその人自身に節約させうる労苦や煩勞であり，またこの物が他の人々に課しうる労苦や煩勞である。貨幣または財貨で買われるものは，われわれが自分自身の肉体を労苦させることによって獲得できるのとちょうど同じだけの労働によって購買されるのである」⁽²⁾〔（ ）内は原文による。以下，断りの無い限り，（ ）や傍点による強調は原文によるものとする。〕と。さらに，アダム・スミス氏は，労働生活の性格について次のように述べていた。すなわち，「等量の労働は，いつどのようなところでも，労働者にとっては等しい価値である，といってさしつかえなかろう。かれの健康・体力および精神が平常の状態で，またかれの熟練および技巧が通常程度であれば，かれは自分の安楽，自分の自由および自分の幸福の同一部分をつねに放棄しなければならないのである」⁽³⁾（下線による強調は引用者による。）と。

上記の引用文からもわかるように、スミス氏は、商品交換を目的とした労働生活を、「労苦」、「煩勞」、「安樂、自由、そして幸福の部分的放棄」として見ていたのである。ヘーゲル氏の肯定的労働論の精神を継承しているマルクス氏は、スミス氏の言う「労苦」としての労働とは、資本主義的生産様式の下での労働の性格にほかならないことを強調していた。マルクス氏によれば、一般的に言えば、「労働は、労働者自身の生命活動であり、彼自身の生命の発現」⁽⁴⁾なのであり、自己形成的・自己実現的活動なのである。しかし、「われわれは今日、資本主義的生産の支配のもとに生活しているが、ここでは住民中の大きな部分をしめ、しかもたえず増大していく一階級は、賃金とひきかえに生産手段—道具、機械、原料、生活資料—の所有者のためにはたらくときにだけ、生活することができる」⁽⁵⁾のである。

言い換えれば、資本主義的生産様式の支配する社会の中では、自己形成的・自己実現的活動である「生命活動」を、彼（労働者）は、必要な生活資料を手に入れるために、売るのである。だから、彼の生命活動は、彼にとっては、生存するための手段にすぎないのである。彼は生きるためにはたらく。彼は労働を彼の生活のなかにさえふくめない。労働はむしろ彼の生活を犠牲にすることである。それは、彼が他の人間にせり売った一つの商品である。したがって、彼の活動の生産物も、彼の活動の目的ではない。彼が自分自身のために生産するものは、彼が織る絹布でもなく、彼が鉱山から掘り出す金^{きん}でもなく、彼のたてる邸宅でもない。自分自身のために生産するものは、賃金^{賃金}⁽⁶⁾〔（ ）内と下線による強調は引用者による。〕なのである。マルクス氏自身のことばでさらに言えば、労働者の本当の「生活は、彼にとっては、この（労働という）活動のやむところで、食卓で、居酒屋の腰掛けで、寝床で、はじまるのである。これに反して、一二時間の労働は、彼にとって、機織り、紡績、鑿坑等としてはなんの意味をもまったくもたず、彼を食卓につかせ、居酒屋の腰掛けにかけさせ、寝床に横にならせるかせぎとして、意味をもっている」⁽⁷⁾〔（ ）内は引用者による。〕にすぎないのであった。

さらに、マルクス氏によれば、資本主義的生産様式が発展し、生産手段に機械が導入され、大工業制的生産様式が普遍化するようになると、個々の労働者の労働が極限まで分業化され、あたかも機械の一部分の労働であるかのような単純労働になるにつれ、上記の資本主義社会における労働の労働者にとっての無意味的・労苦的性格は、やはり極限にまで強まることになるはずであった。また、マルクス氏によれば、資本主義的生産様式の下での労働の場における資本家と賃金労働者との人間関係・社会関係は、消費生活の活動の場であり、活動の舞台でもある市場における販売者（労働者）と購買者（資本家）との間の人間関係・社会関係とその性格が大きく異なるものであった。すなわち、市場における販売者（労働者）と購買者（資本家）との社会関係は、自由意志にもとづく対等平等の契約関係であるが、資本主義的生産様式の下での労働の場における労働者と資本家の社会関係は、労働者は資本家の意志と指揮・命令の下に服し、それらに従って労働しなければならない、支配・被支配の（労働者から見れば）不自由で、不平等な関係なのである。

マルクス氏は、資本主義的生産様式の下での労働の場におけるその資本家と労働者の関係を次のように叙述していた。すなわち、マルクス氏によれば、どの時代にも存在する人間労働の「労働過程は、それが資本家による労働力の消費過程として行われる場合には、二つの独自の現象を示す」⁽⁸⁾のであるが、その第一は、「労働者は、自分の労働の所属する資本家の管理のもとで労働する」⁽⁹⁾ということである。「資本家は、労働が秩序正しく進行し、生産諸手段が合目的的に使用され、したがって原料が少しもむだづかいされず、労働用具が大切にされるように、すなわち作業中のその使用によって余儀なくされる限りでしか労働用具が傷められないように、見張りをする」⁽¹⁰⁾のである。「さらに第二に、生産物は資本家の所有物であって、直接的生産者である労働者の所有物ではない。資本家は、たとえば労働力の日価値を支払う。したがって、労働力の使用は、他のどの商品—たとえば一日のあいだ賃借りした馬—の使用とも同様に、その一日のあいだ資本家に属している。商品の使用は商品の買い手に所属し、そして、労働力の所有者は、自分の労働を与えることによって、実際には、自分が売った使用価値を与えるだけである。彼が資本家の作業上にはいった瞬間から、彼の労働力の使用価値は、したがってその使用すなわち労働は、資本家に所属したのである。資本家は、労働力の購買によって、労働そのものを、生きた酵素として、同じく彼に所属する死んだ生産物形成諸要素に合体させたのである。彼の立場からは、労働過程は彼が買った商品である労働力の消費にすぎないが、しかし彼はこの労働力に生産諸手段をつけ加えることによってのみ、それを消費することができる。労働過程は、資本家が買った諸物のあいだの一過程である（労働者は人間であり、物件とは全く異なる性質を有している存在であるが、その労働力を消費する資本家の立場からすると労働している労働者は、少なくとも理論的には、単なる生きている物件にすぎないのである）。それゆえ、この過程の生産物は、彼のワイン地下貯蔵室における発酵過程の生産物とまったく同様に、彼に所属する」⁽¹¹⁾〔（ ）内は引用者による。〕のである。

労働の場または労働過程における資本家と賃労働者との関係および社会的諸秩序様式について以上のような視点を有していたマルクス氏によれば、それらの性格とは、資本家と賃労働者との関係については支配・従属の関係であり、労働の場または労働過程における社会的諸秩序については専制支配的秩序というものであった。それゆえ、マルクス氏は、資本家と賃労働者の社会関係の性格の、「自由、平等、所有、およびベンサム」⁽¹²⁾という労働市場におけるものから支配・従属および専制支配的秩序という労働の場または労働過程におけるものへの変化を次のように描写していた。すなわち、資本家と賃労働者の関係の物語が、「自由、平等、所有、およびベンサム」という原理の働いている「この単純流通または商品交換の部面から……立ち去るにあたって、わが“登場人物たち”の顔つきは、すでにいくぶんか変わっているように見える。さきの貨幣所有者は資本家として先に立ち、労働力所有者は彼の労働者としてあとについていく。前者は、意味ありげにほくそ笑みながら、仕事一途に。後者は、まるで自分の皮を売ってしまってもう革になめされるよりほかにはなんの望みもない人のように、おずおずとい

やいやながら」⁽¹³⁾と。

以上のような資本主義的生産様式の下における賃金労働者の労働の性格と労働の場での社会秩序の性格の分析を前提とすると、労働者たち自身が実感するであろう資本主義社会の中での、労働者の全生活における基本的矛盾をどのように把握したらよいのであろうか。私見によれば、それは、「個人の人格的であるかぎりでの生活と、労働のなんらかの部門およびそれに属する諸条件に服属せしめられているかぎりでの生活との区別」⁽¹⁴⁾の中に存在している矛盾なのではないかと思われる。そして、その区別は、「諸個人はいつでも自己から出発した。しかし、もちろんあたえられた歴史的諸条件および諸関係のうちにおける自己からであって、イデオログたちのいう意味での《純粋な》個人からではない。ところが、歴史的発展の過程で、そして分業の内部で、社会的諸関係が不可避免的に自立的なものとなる事態をつうじて、各個人の生活のうちにある区別が目立ってくる」⁽¹⁵⁾ようになるという形で、しかも資本主義社会の中で生み出されてくる歴史的形成物としての区別である。

その区別についてマルクス氏のことはさらに言えば、賃金労働者たちにとっては死活の問題に関わる要素を孕んでもいる、「人格的個人と階級的個人との区別、個人にとっての生活諸条件の偶然性」⁽¹⁶⁾である。それは、資本主義的生産様式の下における「プロレタリアたの場合には、かれら自身の生活条件、労働、またそれといっしょに今日の社会の存立諸条件の全体が、かれにとってある偶然的なものとなってしまうので、一人一人のプロレタリアは、それを全然コントロールできず、またどんな社会的組織をつくっても、かれらにそれをコントロールすることなどできなくなっている。そして一人一人のプロレタリアの人格とかれにしいられている生活条件、つまり労働との矛盾は、かれ自身にとってはっきりした姿をとっている。かれが若いうちからいけにえにされるだけに、またかれを他の階級へうつらせるような条件を自分の階級のうちにあってうようなチャンスがかれに欠けているだけに、ことにはっきりとわかる」⁽¹⁷⁾ものなのである。

人格的な個人と労働生活上の個人との区別と矛盾、マルクス氏のことは言えば、「人格的個人と階級的個人との区別、個人にとっての生活諸条件の偶然性」の第一の内容は、労働生活に入れるかどうかについての偶然性であり、労働市場における需要と供給の状況がどうなっているかという条件に依存している偶然性である。一見すると、労働者「諸個人は、かれらの生活諸条件がかれらにとって偶然的なものとなっているだけに、以前にくらべてブルジョア支配下のほうがより自由なような表象をもつ」⁽¹⁸⁾かもしれない。しかし、市場経済に依拠して自分および自分の家族の生活を実現するためには、何らかの労働生活にありつかなければならないのであるが、そのこと自身がこんどは労働市場の需要と供給の偶然的諸条件によって制約されているがゆえに、「実際にはもちろん、かれらはより不自由である。なぜなら、以前よりもいっそう物的な強制力に服属させられるわけである」⁽¹⁹⁾からなのである。

人格的な個人と労働生活上の個人との区別と矛盾の第二の内容は、労働生活内における「交

通形態の諸個人の行為あるいは表現……への関係」⁽²⁰⁾の中に現れる区別と矛盾である。さらにこの第二の内容は、さらに、①諸個人が労働生活以外の生活も含めた自己および自己の家族の全生活において欲求する生活諸手段およびサービスを市場で購入するのに必要となるお金と賃金という形で労働生活によって手にするお金との区別と矛盾、②諸個人が自己の関心や本性に合わせてしたいと思う労働内容と労働のリズム（労働の強度、ペース、時間など）と実際に資本家から命じられ、指揮を受けて行う労働の内容とリズムとの間の区別と矛盾、そして③諸個人の労働生活と労働生活以外の所での生活との間の区別と矛盾という3つの下位区分された内容に分けて把握することができよう。

ここまで、アダム・スミス氏とカール・マルクス氏に依拠しながら、資本主義的生産様式を土台としている市場経済社会における労働生活の消費生活とは全く異なる社会的性格について、理論的・理念的に把握する試みを行ってきたが、ここで、次のことに注意を喚起しておかなければならない。それは、ここまで検討してきたように、市場経済社会における労働生活は、スミス氏によっては苦役として、マルクス氏によっては疎外された労働として、一見すると諸個人にとって全く意味をもたない、むしろ否定的な性格しかもっていないかのように論じられてきたかのように見えるが、基本的にはそうした性格が貫徹しているとはいえ、現実生きて労働している労働者たち自身は自分たちの労働生活の中で、単に自己および自己の家族が生きるためだけに労働している、すなわちパンだけのために労働しているという意味や意義を、ときにははるかに超えた自分たち自身にとってもつ何らかの意味や意義を見出し、実感もしてきたし、しているにちがいないということである。資本主義的生産様式の下における労働の社会的性格について徹底的に否定的性格だけを論じていたかのように見えるマルクス氏も、人類史的視点から見たときには、人類の労働生活と労働生活にかかわる「交通諸形態」の歴史的進化を、人間諸個人の諸能力・力能および自己の行為と表現のための諸条件の発展史として進歩的に評価していたのである。

そのことを、煩を厭わず、マルクス氏自身のことばで確認しておくならば、人間諸個人の物質的生活を支える生活諸手段の生産活動、すなわち労働生活のための、「最初（諸個人の）自己表現の諸条件としてあらわれ、あとでは自己表現の桎梏としてあらわれる、これら（生産諸力にかかわる）さまざまな諸条件は、歴史的発展の全体にわたってつづく交通諸形態の一連の系列をつくりあげる。そのつながりは、以前の桎梏となった交通形態のかわりに、あらたな、より発展した生産力、およびそれにとまなう諸個人のすすんだ自己表現の仕方とに一致する交通形態におかれ、それはそれで……こんどはまた桎梏となって、また次に他の交通形態にとりかえられるというところにある。これら諸条件は、どの段階でも、同時代の生産諸力の発展度に一致するのであるから、これら諸条件の歴史は、同時に、発展をつづけ、おのおののあたらしい世代によってうけつがれてゆく生産諸力の歴史であり、またそのことによって、諸個人自身が発揮する諸力の発展の歴史でもある」⁽²¹⁾〔（ ）内と下線による強調は引用者による。〕

のである。

ここまでのマルクス氏の議論を踏まえて言えば、人間とは、ただ単に生きるということだけでは満足せず、自己表現的・自己実現的意味を求めて生きようとする動物であると言うことができるのではないであろうか。そして、そのことは、現代の労働者たちの労働生活は、市場経済社会または資本主義社会における労働生活であるという点では、基本的には、スミス氏のいう「苦役としての労働」生活、マルクス氏のいう「疎外された労働」生活という性格を有しているはずであるが、労働者たち自身は、そうした中にあっても、自分たちの労働生活に何らかの自己表現的・自己実現的意味を見出しているか、見出したいという願いをもって自分たちの労働に従事しているに違いないことを示唆しているのではなかろうか。

では、労働者たちが自分たちの労働生活に求める意味、または働く喜びとはどのようなものなのであろうか。ここでは、紙数との関係で、一般論として確認することだけにとどめざるをえないが、第一に、一人前として他者から認められる形での市場という社会機構を通じての物質的社会生活への社会参加の実現であり、自己（および自己の家族）の経済生活の自立の実現ということがあげられよう。他者に自己の経済生活が依存していた状況から自立へ移行するにともない、他者との社会的諸関係の形態も性格も大きく変化するものとなろう。第二に、経済的報酬をあげることができよう。第三には、自分の仕事の内容と達成感、そして自己の労働が他者の生活の実現に与える有用な働きがあろう。ただし、その現実の中身と性格は、労働の内容や他者とは具体的には誰なのか、すなわち上司、労働仲間、自己の労働によって生み出される商品の購買者、自己の家族などなのかということによって変わってこよう。第四に、労働生活を通した自尊心の獲得があげられよう。ただし、その性格に関しては必ずしも肯定的なものとは限られず、支配欲、優越欲、名声欲を基礎とした自尊心という場合もあろう。さらに、第五に、同じく労働生活を通した自己アイデンティティの確立があげられる。どの時代、どの社会でも、労働生活を通してえられる自己アイデンティティこそが、諸個人の自己アイデンティティの中核を成していると言える。

(有賀喜左衛門の日本の生活および生活にかかわる社会関係の文化論)

一般論としては、労働者諸個人が労働生活に求める意味を上述のようにまとめることができるとしても、ここで、さらに、諸個人が労働生活に実際上主としてどのような意味を求めるのかについては、諸個人が生きている時代および社会の生活文化または生活における社会関係文化のあり方（様式）によって異なって現れるのではないかということを指摘しておかなければならないであろう。それゆえ、次には、日本という社会においては、労働者諸個人が自分たちの労働生活にどのような意味を求めてきたのか、現在求めようとしているのかについて具体的に検討するためにも、日本の生活および生活にかかわる社会関係の文化とはどのようなものなのかを簡単にでも見ておかなければならないであろう。本稿では、その作業を、有賀喜左衛門

氏の、氏の論考「封建遺制と近代化」の中で展開している議論に依拠して行うことにしたい。

日本社会における人間関係・社会関係の特質は、例えそれが個人的で私的な関係であったとしても、諸個人間の人間関係における自己および相手の相互認知に、それぞれの個人が属している「社会集団」の有している社会的地位・威信・権威などの属性が当の個々人のやさしさや誠実さなどの人間的諸属性以上に大きな影響力をもっているというところにある。すなわち、私たちは、日常生活において、社会関係にある相手を生身のいち個人として認知するのではなく、相手が属している「社会集団」の一員として、その「社会集団」の有している社会的地位や威信・権威を身に帯びたかぎりでの個人として認知しようとする、またはそのことをいやおうなく強く意識してしまっただけで認知する傾向にあるのである。それをここでは、諸個人が所属している「社会集団」を通しての権威主義的・後見主義的人間関係・社会関係と呼んでおこう。その「社会集団」の中で私たちの人間関係・社会関係上の諸意識に大きな影響力をもっているものは、近代以前は家および官僚諸組織であったが、近代以降は、そのうち家の有している影響力が低下・弱化し、官僚諸組織、民間諸企業、そして諸学校などが大きな影響力をもつ「社会集団」となってきた。とくに、第二次世界大戦後は、民間諸企業のもつ影響力が増大してきたと言ってよい。では、かかる人間関係・社会関係はどのような諸特質をもつものなのだろうか。

有賀氏によれば、日本社会の、日常生活にかかわる通歴史的な人間関係・社会関係の特質は、下の者の私を棄てた上の者にたいする奉公と上の者の下の者自身およびその身内の者たちにたいする生活保障の相互給付関係を内実とする、親方・子方関係に代表されるような主従的・身分的上下関係であるというところにある。そして、そうした社会関係に対応した諸個人の精神生活の特質は、同じく有賀氏によれば、上の者または権威にたいする、「人情」より「義理」を優先する没個人主義的・絶対的服従という心的態度にある。下の者の、日常生活の中で最優先される諸個人の生活目標とは、上の者に奉仕することによって世話を受けるという生活関係に媒介されて、私を棄てた、没個人主義的生活活動によって、自己および自己の身内の生活確保を図ることである。そうした行為・行動様式を、ここでは、生活関係における日本的プラグマティズムと呼んでおこう。そして、日本社会における生活美学とは、自分の身内の生活保障のために、私を棄て、自分および自分の身内の生活保障を与えてくれる、自分が属している集団とその集団の上の者にたいして忠心の誠を捧げることの中に存在しているのである。

こうした個人と個人が所属している社会集団との関係、また社会集団内の諸個人間の人間関係・社会関係の性格は、古代の日本独特の氏族制度のあり方にその源があると有賀氏はみている。すなわち、「私（有賀氏）の最近の論著はすべてこの問題（日本の階層制の基本性格）の究明に関係しているので、私が現代生活を基礎として日本歴史の中でこれを論証しつつある過程をここでは省略して、結論をのべるなら、日本社会構造における氏族の性格はこれである。氏族といっても、もちろん、特殊な日本の氏族を指すのであって、一般にclanと称するもの

と同じではない」⁽²²⁾〔（ ）内は引用者による。〕と有賀氏は主張していた。さらに有賀氏の日本の氏族についての説明に耳を傾けるとするならば、「日本の氏族とは生活上（従って政治上でも）密接な上下関係（主従関係）が生ずる時、氏神または氏寺信仰を媒介として同統意識（同族意識）に結びつく関係である。しかしこの上下関係が崩れる時は同統意識は消滅し易い。即ち生活上の平等関係においてはこの性格は潜在する。これは同統意識を持つので、基本的には同統関係と表現して良いが、生活上の種々の場面に顕れ、それを規定する条件の変化によって形態上の差異が生ずる。同統意識を示す言葉としての代表的なものは、オヤコ、オヤカタコカタ、オヤブンコブン等である」⁽²³⁾。

かかる性格上の起源を有している日本の社会集団およびその集団に属している構成員の行為・行動原理の基本性格は、自己の属している社会集団の永遠の繁栄と自己利害を最優先し、貫き通すことであると有賀氏は言う。その存在原理と行為・行動原理は、普通「公（public）」な性格を持っていなければならないとされている政治・行政組織・集団であっても変わるところは何もない。有賀氏は、このことを、江戸時代の徳川幕府の政治構造を説明する中で次のように主張していた。少々長くなるが、日本社会の社会集団の社会的性格を理解する上で非常に大事な文章だと思われるので、労を厭わず全文引用しておこうと思う。有賀氏いわく、「江戸幕府の構造には、『ノォレンウチ』と同じような相互関係のくみあわせが見られる。将軍はその中心的存在であって、徳川家と幕府と呼ばれる中央政府は非常に密接に将軍に結び付いていた。幕府は将軍の直接の家来によって構成されていた。将軍と彼の直接の家来たちは個人の関係をもっているが、徳川家とその直接の家来の家々は、これまた主従関係によって結び付けられていたから、従者の家々の成員たちもまた徳川家の従者であるとみなされ、徳川家への奉仕をまっとうする義務をもつものであった。これらの武士の家々の集団は、『カチュウ（家中）』と呼ばれ、徳川幕府の支配階級であると認められていた。この行政組織の基本原則は、『家中』の利害が、いついかなるときにも、庶民の利害より優先されるべきものとする点にあった。もとより、そこには国民全体の福祉を考える政策などはなかった。それゆえ、商人たちが彼ら自身の生活保障と集団保全を『ノォレンウチ』を組織することによって保持するようにつとめたのも、農民たちが数家族で構成する同様な集団を組織したのも、避けがたいことであったのである。これらの、農民たちの集団は『マキ』とか『カブウチ』とか呼ばれ、武士社会の『カチュウ』にひとしい集団であった。これらの集団は、その中にふくまれる諸家族のための経済的な協同体として作用した。武士の『^{カチュウ}家中』のなかでは、ほかの^{カチュウ}家中との競争に勝つためには自分の^{カチュウ}家中集団を強化することが常に必要とされた。しかし、それぞれの家中の内部では、家来たちは主君の家族に優越性をあたえ、彼らのおこなう奉仕に対して彼らは主君の家族から経済的庇護を得た。つまり将軍の直接の臣下たる大名もまた彼自身の^{カチュウ}家中をもっていた。彼の家中の規模は、彼が支配すべく将軍からあたえられた領土の大きさによって決定された。彼の領土は幕府によってもまた統制されていたから、家中は二重構造として存在していた。それぞれの家

中は、主従の家連合としての性格をもっていたから、われわれは、この政治構造が、ユニークな日本の家の組織をその基礎にもつものであると認めることができる」⁽²⁴⁾のであると。

有賀氏によれば、ここまで検討してきたような社会集団および社会集団間・社会集団内の人間関係の社会的性格は、社会的位階制度における「上位優先」の思想として特質づけられるものであるが、この特質は、また、公私の論理およびその論理を表現している義理と人情の関係の日本の特質をも形成しているのである。有賀氏自身のことばで、それを確認しておくならば、上記のような社会的性格をもつ「日本人の集団生活は、個人の確立がほとんどなく、その首長をして代表させる性格が強かった。家でも、村でも、国でも、あるいは武士領でもそうであり、あたらしい現代的な諸団体すらその傾向は強い。そこでは『私』は集団一したがって集団の首長に優先されてしまう。この関係を示すものが『公』と考えられ、義理または恩という特殊の内容が、与えられたのであって、『私』といっても、欧米人の private とは多少ことなるし、『公』といっても、欧米人の public のごときものとも幾分ことなる。この二つは連関しているからである。戦後、個性の確立が叫ばれ、世情もかなり変化しつつあるので、公私の考えも変りつつあるとしても、まだ、このような公私混交は、いたるところでみられ、その内容的変化もすくない」⁽²⁵⁾のである。

「義理と人情の考え方も、これと密接に関連したものであって、義理とは私事にたいして『公』と考えられるものであった。人情は私事であったから、義理が優先したのである。しかし義理は公と同様に、階層的に存在した。たとえば自分と親とのあいだでは、親にたいする義理が優先したが、主人または本家とのあいだでは、自分の親より、主人または本家にたいする義理が優先したし、さらにそれ以上の階層の人や家にたいしては、下級の主人（主家）より上層の主人（主家）への義理が優先する関係にあったから、武家時代には大名や幕府に、現代なら天皇につくす忠義（義理）を第一のものとしたのであって、日本では忠が孝に優先したのは、ここに根拠がある。この心情は、奈良時代以来多く変化していない。たとえば防人の歌に、『海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大君のへにこそ死なめ、かへりみはせじ』とある」⁽²⁶⁾。

かかる日本社会の社会集団および社会集団と個人の関係・社会集団内の諸個人間の人間関係上の特質は、日本社会独特の人間関係・社会関係上の道徳を歴史的に形成してきた。それは、特徴を際ださせた言い方をあえてするならば、上下関係の人間・社会関係における上位者の命令の絶対性と下位者の上位者の命令に対する絶対的従順性・服従性である。もちろん、かかる道徳意識は文字通り純粹にどのような場面においても要求されたり、現れたりする者ではないが、絶えず私たちの生活意識の中に浸透し、潜在化している意識であると言ってよい。かかる「氏神信仰に示される主情的な没我的態度」⁽²⁷⁾という、社会集団間および社会集団内人間関係上の特質を有している日本社会とは、倫理の行き渡った社会建設のためには、君主・エリート・リーダー・親方・世話をする人など、社会の中で上に立つ者たちの「道義心の涵養度・道義心の高さ」が決定的な重要性をもつ社会なのである。倫理の行き渡った社会建設にとって最

悪の社会的状態は、「道義心の高さ」を示せない社会関係上の上の者が、下の者にたいして道徳を説く（説教をする）という構図であろう。そうした中で、道徳の社会的信頼は失墜していくことになるのである。

では、「高い道義心」とはどのようなものであろうか。それは、有賀氏によれば、真の民主主義社会を実現するための人格資質であり、政治的権利としての形式的平等だけでなく、他者の人格と意志の尊重という「自由の理論と結びつかねば」⁽²⁸⁾ ならない高い倫理的態度のことであった。また、「高い道義心」とは、自己および自己の所属している社会集団の私的利益追求ではなく、人類全体に通じるような普遍的な倫理的態度を意味するものでもあった。しかし、有賀氏は、そうした「高い道義心」を獲得することは、氏神信仰を基礎としている日本社会の生活文化の下では、上に立つ者たちであっても、極めて難しいことであると見ていた。氏いわく、「氏神信仰は常に領域の観念と結びついていたことはその基本的性格の一つであり、領域の大小にしたがい同族団または氏神鎮守、村の氏神鎮守、大名領国の氏神鎮守、総国の氏神鎮守のような概念で示されていた。家の神棚はこれらを小さくした守護神の概念であって、同族団の本家分家の関係において見る場合に、個々の家の神は同族団の氏神鎮守と同性質の神であることを最もよく示している。家の神が家の生活領域の守護神であることは年中行事の祭祀に極めて明らかに現れていた。これらは日本人の個人が属する種々の地域集団の守護神であり、それら集団の結合の象徴でもあり、そこでは領域の大小にかかわらず、司祭者がその集団を代表する意味を持っていたので、他の個人は埋没された姿にあった。祈願の内容は集団の守護を通じて個人の幸福にまでおよんだとしても、祈願の態度はかみがみの心になうことであり、かみがみは人間的であったから、峻厳な内省的な道德律による個人的覚醒を必要とするものでなく一定の観念内容を持つみそぎとはらいとを行った後供物と舞踊とを捧げることで足りた。みそぎにはみそぎの観念内容が示す惨酷とまで思われる苦行も見られたが、それは呪術的であり、祝詞などにも見られるように、罪の観念でも、呪術的にはらい得るものであったから、内省的な精神的な深さを欠いていた。みそぎとはらいとは一定の呪術的行為により祭祀する人々の心が純粹無雑になったという主観的心境になることであり、これによりかみの託宣を受け得る状態になると考えた。だからここではかみがみに対して迎合的で没我的になるのみであり極めて主情的であった。この態度は高い外国文化—したがって儒教や仏教やキリスト教等の外国宗教を取り入れた際の日本人の基本的態度にも通ずるものであった。氏神そのものに何ら ideologisch なものはなかったから、氏神を祭祀する人々の態度も主情的な心境をもって足りた。それゆえ、それらの宗教との信仰的、思想的対決は見られず、白紙が濃さのちがうすみを吸い取ると同じ態度で、これらのものをすべて吸い取って矛盾すら感じなかった。これに対しキリスト教では個人の生命を普遍性が高めるには、神との対決が必要であった。そして超人的な道德的至上者に対しては必然的に罪の自覚がなければならなかった。それは内省的で、精神的にきびしいものであった。そしてこれなしに救済はなかった。そのかわりこの救済は領域にも限

定されず、民族や国民を超える普遍性を持っていた。これには個人の覚醒を深い根拠としたことがすでに早くから現れていた」⁽²⁹⁾（傍線による強調は引用者による。）。「日本人の間にもこのような個人的覚醒が全然なかったというのではない。たとえば仏教は無や空の思想をもって自覚の宗教として日本に入ってきた。儒教も高い倫理的思想を日本人に教えた。日本の少数の天才達はこれらの世界的思想に啓発されて人間的な高い自覚に達したことを私は否定するものではない。またこれらの個人的自覚の過程においてきびしい修行が行なわれ、高い道徳的水準が示されてもいる。日本の低い生活水準でも、普遍的価値にその生命を生かそうとした天才達の精神的飛躍をさまたげるものはなかったが、これは日本人における一般的水準ではなかった」⁽³⁰⁾と。

現在の日本社会における政財官世界における経済のグローバル化時代の中での相次ぐ不祥事の続発と、その中でテレビニュースなどを通じて否応なく私たちの目に見せつけられる上に立つ者の無責任さを露わにした姿勢は、現在の日本社会のエリート・リーダーと言われる人々は、決して有賀氏が言う「天才達」ではなく、もしかしたら「一般的水準」の者でさえないかのような事実を立証しているかのようである。いずれにしても、有賀氏の封建遺制論争・近代化論争にかかわる議論に依拠しながら検討してきた、上述のような日本社会における社会的集団間、社会集団と個人の関係、そして社会集団内における人間関係の特質が日本の職場社会（本稿では日本の企業社会でそれを代表させ論じていくことにしたい）にどのように引き継がれていったということが、本稿の課題にとっては重要なことである。有賀氏は、明治維新以降成立してくる日本の企業組織を、それ以前の社会の社会集団の特質であった家制度とは、基本的には、異なった組織編成原理によって形成されてきたものであることを正しく認めていた。氏自身のことばで言えば、「維新以後の社会構造における発展の中で最も特徴的なものは、特に大企業と官僚組織とにおいてこのような家制度の制約から離れて行ったことである。このことは半面においては江戸時代の武士社会の官庁機構でも、企業体でも、その全体的規模がいかに小さかったかを示しているともいえるが、しかしそれはただ小規模だったが故に家制度に制約されたというのではなく、性格的に、基本的に家制度に制約されていたことを知るのが大切である。維新以後においてはこの程度の小組織では新しい発展に堪えることができなかったことも事実であった。そこで企業は大きくなればその職場は家と分離した。家業におけるいわゆる店と奥との分離であり、店（職場）の巨大な発展を目指して進んだのである」⁽³¹⁾。

しかし、有賀氏は同時に、社会集団間および社会集団とそのメンバーと社会集団内の人間関係の性格は、明治維新以前の社会的性格を色濃く継承したことの指摘も忘れてはいなかった。氏いわく、そのように維新以降成立してきた企業や官僚組織は、「形態的に家との分離が行なわれたとしても、性格的にその分離が完成したとはいわれなかった。それは大企業や官僚組織をめぐる無数の中小経営は家制度との結びつきを強く持っていたことが、これらに外部から作用していたこともその大きな条件であったかも知れないが、これらのもの自身の内部にもその

理由があった。たとえば政府要員やその他の人々が宮中席次によって格付けされたことなど最も代表的なものである」⁽³²⁾。「また大企業や官僚組織においては、その公的関係と並んで生じた成員相互の個人的私的関係においては彼らの家関係として結びつくことも多かった。そしてこの私的関係には公的関係が反映して、職場における下位者は上位者から世話や恩顧をうける義理を感じ合い、それらの義理をはたす風習を生じた。すなわち家関係の節季の伺候や葬婚等における手伝いを、あるいは私的なものとして、あるいは公私混淆して行なうことがそれであった」⁽³³⁾。さらに、「たとえば維新以後発展した企業体において、従業員の葬儀の場合を見れば、企業体として公的に香奠供物を出す風習が生じたが、それに伴ってその従業員が個人的にもそれを行なう風習であった。後者は私的関係にほかならないが、それは企業体における職務の格に応じた香奠供物を出すことがきわめて一般的であった。これらは企業体の内外における平素の付合関係の性質を示すものにほかならない。これらの生活規範のうちで、上下の関係のものや形式的制約を感じる場合にかぎって、それに義理の意識を結びつけ、それを封建的と規定する傾向が強い。村落の場合については、葬儀などの風習における形式的制約を共同体的強制などと規定することも多い。しかしよく考えると、義理の意識の有無にかかわらず、これらは生活規範のもつ基本的な性質であって、それは時代のいかに問わない。だから、どの時期でも社会関係においては、その時期の生活条件に規定された一定の生活規範が成立し、それは人々によって守られねばならなかった」⁽³⁴⁾（傍線による強調は引用者による。）のであると。

ここまで有賀氏の議論に依拠して、日本社会における社会集団間および社会集団と個人、社会集団内における人間関係の社会的性格は、戦後の時代の企業社会にも、その形態は変えながらも、基本的には継承されていったと考えられる。とするならば、それはどのような形態として現れたのか、またその社会的・生活的諸条件とは何であったのか、そして現在の経済のグローバル化の中でどのような変容を迫られているのかということを考察することが、次の作業課題となるであろう。

〔戦後日本における企業（会社）と個人・企業内人間関係の社会的特質〕

戦後、経済の高度成長期を通して形成されてきた日本の企業社会とそこで働く人々との関係および企業社会内の人間関係の特質は、これまで、「終身雇用」・「年功序列的処遇」・「企業内組合」という3点セットの用語で把握されてきた。この3点セットの用語こそが、日本的経営と呼ばれる日本の企業社会の特質を表現してきたのである。ではそうした諸用語で表現される日本的経営を行っている企業社会（以下会社と記述する）とは、いったいどのような社会集団または社会組織なのであろうか。長年日本的経営の特質について研究してきた、三戸公氏は、会社とは、「日本人が一生をすごす『家』」であると言う。すなわち、三戸氏いわく、「日本の組織は家である。日本の経営は家である。日本の会社は家である」⁽³⁵⁾。そして、「日本の会社は家だからこそ、外国の会社と違った行動をとるのだ。日本的経営といって、外国の経営

との違いが論ぜられる。日本的経営の秘密は、家の論理にある。家の論理が、資本の論理・商品の論理・契約の論理にからみつくことにより、日本の会社をして、会社ではない、まるで軍隊だと言わしめるのである」⁽³⁶⁾。では、「家とは何か、家とは組織体であり、経営体である。家の成員・メンバーを、家族と呼ぼう。家の成員たる家族間の基本的関係は、(単に血縁にある親子という意味ではなく、日本社会の生活組織体における親分・子分、または親方・子方関係という身分的上下関係・主従関係にある)親子関係である」⁽³⁷⁾〔()内は引用者による。〕と。

ただし、「家」としての会社社会は、自己の組織の中核を担う構成員と周辺に位置づく構成員とではその処遇に全く異なった原理を有している、構成員の処遇に関する「二重構造」であることをその組織原理の特質としている⁽³⁸⁾。それゆえ、会社が、自分が一生をすごす家となるのは、正式にその「家の成員・メンバー」と認められた労働者たちに限って言えることなのではある。では、会社が自己の正式なメンバーとして認めた労働者たちに求めるものとはいったいどのようなものであったのであろうか。その第一のものは、会社組織への忠誠と情緒的コミットメントであろう。それは、まず、会社組織への帰属意識、すなわち愛社精神をもつことであり、会社の命に絶対的に従う姿勢をもつことであり、さらに会社の構成員の間で協調的な態度をとることであった。とくに、会社への忠誠心と会社の命令に無条件で従うことが重視されたであろう。例えば、会社の命令に拒否的な態度をとることは、それだけで会社への忠誠心を疑わしくする態度であり、たとえどんなに利益面などで会社に貢献していた者であっても、たった1回の命令拒否はそれだけで解雇の十分な(法律的に出はなく、会社の組織原理の点から見ての)理由に成りえた。1998年の新聞『赤旗』は、何度も特許をとるなど技術面で会社に貢献していた技術者であった日立製作所の技術者が、「たった一回の残業を拒否して日立を解雇され」⁽³⁹⁾、裁判となっていることを報じていた。

そうした会社と労働者の関係の性格は、会社内の上司と部下の社会関係にも浸透していたと言っていよい。すなわち、部下から見れば、上司＝絶対服従の相手(他者)ということになるであろう。それだけでなく、そうした会社内の上司と部下の関係が会社での仕事の時間を離れた私生活の生活領域の中にまで浸透してくるところに、日本の会社における上司と部下の関係の特質が存在すると言える。上司と部下の関係は、生活上または人間性陶冶上の指導者・被指導者的関係、さらに生活上のお世話と奉仕の関係という性格を有していた。これは、会社での公的な関係とそこから離れた私的な生活領域を峻別し、自己のプライベートな生活をなるべく会社内の公的な関係から峻別し、自由なものとするに大きな価値をおいている西欧の職場と労働者および職場内の人間関係の性格とは、全く異なったものと言えよう。

日本の会社は、自分のところの労働者の例えば家庭生活における生活態度にさえも関心を示し、会社にとって望ましい生活態度をとることを求めようとしていた。オイルショック後の不況によるリストラ時代に、能力開発研究所所長の坂上肇氏によって書かれた『こんな社員はク

びになる』の中で、クビにならないためには会社員たるものは自分の家族とどのようにつき合うべきかについて次のような要求をしていた。氏いわく、帰宅をいそぐサラリーマンは、プロとして失格だと。すなわち、「いうところのマイホーム社員のなかには、終業時間が近づいてくるにつれ、そわそわしはじめる人がいる。そうして、終業時間になると、『発車オーライ』とばかり、いそいで会社をでて、一路わが家へといそぐ。これは理屈からいえば、なにものかめだてすることではない。労働契約によって、きめられた時間だけはたらけば、あとは本人の自由である」⁽⁴⁰⁾。「しかし世の中は、そういう単純理論だけで通用するものではない。たとえば、仕事が残っていると、同僚がいそがしそうにしているとき、それを手伝ったり、すこし残業をして、仕事を片づけるということは、いくらでもあることだ」⁽⁴¹⁾。しかも、「サラリーマンの多くが、帰宅を急ぎ、家に帰ってやることといたら、赤ちゃんのおしめのしまつから、食事の支度、掃除までも、『自分から進んで』か、または『たのまれればやる』^(ママ)やるということで、みごとなマスラオ派夫ぶりを発揮しているのである。しかもその数は、七〇・六％、じつに十人に七人という数である」⁽⁴²⁾。「多くのサラリーマン家庭では、すでに家庭の実権は、妻の手に渡っている。それなのにまだこりず、喜々として家庭奉仕に勤めるサラリーマンが、こんなに大ぜいいるということは、なんということであろうか」⁽⁴³⁾、嘆かわしいことであると。

このように、会社への奉仕よりも自分の家庭への奉仕を優先するサラリーマンを批判した坂上氏は、返す刀で、「家族を冷たくあしらって」⁽⁴⁴⁾いるサラリーマンたちを切って棄てる。氏いわく、「中国のことばに『修身齐家治国平天下』というものがある。これは、自分の身も治められないものに家は治められない。自分の家庭も満足に治められないものには、国を治める資格はないという意味である」⁽⁴⁵⁾。「ところが社員のなかには、自分の家庭がうまくいっていないものがけっこういる。家庭が乱れていれば、結局会社の仕事にもさしつかえることになる。なかでも問題なのは、家族に冷たくあたっている社員である。自分を育ててくれた親を粗末にする。自分の片腕になって内助の功をつくしてくれている妻に冷たくあたる。あるいはまた、子どもに親らしいことをしてやらない社員などである」⁽⁴⁶⁾。結果として、家族間のトラブルを起こし、「そういう精神的な問題で、クタクタにな(り)……、会社の仕事もろくろく手につか(ず)……、しまいには、それがもとでとうとうノイローゼ気味になり、会社を休むことになってしま」⁽⁴⁷⁾〔()内は引用者による。〕う者もでることになるのだと。

日本のサラリーマンは、大変だ。会社の仕事や同僚との関係よりも家族サービスを優先しているといっちは批判され、今度は、会社の仕事や同僚との関係を優先すると、家族を冷たくあしらってはいないかと、怒られるのだから。ここまで検討してきたような、労働者の私生活領域である彼らの家族生活や趣味的・余暇的・思想的生活領域まで、会社や会社での上司の監視や指導の目が注がれる日本の会社と会社員との関係、会社内の上司と部下との人間関係の特質は、労働者または会社員の生き方という観点から見ると、それはどのように見えてくるものなのだろうか。それは、一言で言えば、滅私奉公、すなわち、自分と自分の生活を棄てて会社第

一主義に生きるということであろう。人間存在の中核的性格である、自尊心の在りようという点からいえば、それは、自分の自尊心をすててバカになるという生き方であろうか。日本の会社で生きる、より一般的に言えば、組織人として生きる生き方とは、そのような生き方が求められると言えるのである。

では、そうした生き方を求められた日本の会社の会社員の心情とはどのようなものであったのであろうか。一言で言えば、それは、「感謝したり恨んだり」・「愛憎半ばする複雑な心境」というアンビヴァレントな心情というものであろうか。2006年2月25日付『朝日新聞・土曜版』の「ササエさんをさがして」という記事には、ササエさんの四コマ・マンガを題材として、上下関係を軸とした会社組織に生きるサラリーマンの心情について描かれている。すなわち、「ふん、上司がなんだ、会社がなんだってんだー。面と向かっては言えず、のど元でぐっとこらえた経験は、組織で働く人ならだれしも経験があるだろう。いつの時代も職場の上下関係の煩わしさは変わらないが、『ササエさん』の時代はもっと上司がえばっていた」⁽⁴⁸⁾。「部下の私生活も、上司と切り離せなかった。風呂上がりの波平が突然自宅を訪ねてきた社長夫人と鉢合わせしたり、マスオの同僚が上司の娘と無理やり縁談をさせられたり……。部下にとってはどれもいい迷惑」⁽⁴⁹⁾。「こんな漫画もあった。『ご栄転、バンザーイ』と駅のホームで上司を見送る社員たちの中に、『バンザーイ、セイセイシタゾー、帰ってくんない』と叫ぶ男性の姿。思い切った言動かと思えば、『いっぺん言ってみたい』と題されたこの作品、妄想だから、なんとも哀れだ」⁽⁵⁰⁾と。

岩田龍子氏は、氏の前掲書の中で、そうした日本のサラリーマンの心情を、「組織への愛着と反撥」として次のように解説していた。氏いわく、「組織に依存しこれに愛着をもちながらも、組織を去ってゆくものにそこはかたない^{せんぼう}羨望を感じたり、組織を去ったものが苦闘しているという話には安心と同情を禁じ得ない人びとが、逆に組織を去ったものの『快哉』にショックを受けるといった（日本の会社で働くサラリーマンによく見られる）現象は、大変興味深い」⁽⁵¹⁾。

「この現象は、『会社人間』化してゆく傾向とそれに対する心理的抵抗との間の緊張関係の表現とみられる。それは、長期的な雇用制度のもとで、雇用の安定とそれに対する心理的抵抗との間の緊張関係の表現とみられる。それは、長期的な雇用制度のもとで、雇用の安定と引き替えに、自分の可能性を特定の組織に限定して生きることを迫られることから来るものである。人によってはそれは、重苦しい抑圧的な作用を及ぼすもので、しばしば、抜き差しならぬところまで強められてゆく」⁽⁵²⁾。「もっともこれを抑圧と感ずることなく、『組織人』化の圧力に対してスムーズに適応してゆく若ものも少なからずいるかもしれない。おそらく彼らは、組織の中で活躍することに喜びを感じ、組織に貢献し、その力を活用することに生きがいを感じるだろう」⁽⁵³⁾と。

ここまで見てきたような強い情緒的コミットメントを求める、日本社会における会社と会社員および同じ会社内の上司と部下との関係・同輩同士の関係を実現させてきた条件とは、何で

あったのであろうか。おそらく、まず、他者から感情的に受け入れられることにより強い幸福感を感じるという日本人のもっている社会的パーソナリティ特性があげられよう。例えば、社会心理学分野の「幸福感により焦点をあてた比較文化研究では、(日本人を含む)東洋の人々のほうが、西洋の人々よりも、他者、とりわけ身近な人々からの情緒的サポートを受け取ることが幸福感と結びついていること」⁽⁵⁴⁾〔()内は引用者による。〕が示されてきたのである。すなわち、「日本、フィリピン、アメリカの参加者に対し、他者からの情緒的サポートの知覚と個人の自尊感情がどの程度個人の幸福感に寄与するかを」⁽⁵⁵⁾調査した、「北山と内田らの一連の研究」⁽⁵⁶⁾では、「いずれの文化においても個人の自尊感情が幸福感を予測する傾向がみられましたが、これに加えて、日本とフィリピンのデータにおいては、他者からの情緒的サポートの知覚も幸福感を予測する傾向がみられました。しかしアメリカのデータでは、他者からの情緒的サポートの知覚が幸福感を直接的に予測する傾向はみられ」⁽⁵⁷⁾なかったのである。

このように、「相互的協調的自己観が優位である文化における人々は、交換される情緒的サポートをモニタリング」⁽⁵⁸⁾し、それが得られることによって、幸福感をいなく傾向をもっていえるのである。ときには、他者に情緒的に受け入れられ、サポートしてもらうためには、自分を棄てることも厭わなかったのであろうと思われる。しかし、とは言っても、自己を棄て、自分の家族生活をも巻き込んで犠牲にする代償を払って、会社第一主義での生活をおくるとい生活・行動様式は、ただ単に、日本人の上述のような社会的パーソナリティ特性だけでは説明することはできないであろう。とくに、1950年代後半以降の経済の高度成長時代に消費生活が自立した生活領域として出現し、発展してくる中に育った世代のなかから、次第に、共同的または協調的關係よりも個人の行動の自由を優先する「個人化」的生活・行動様式という新しい生活・行動様式が日本社会にも目立ち、根づくようになってくるにしたがって、自己を棄て、自己および自分の家族生活を犠牲にしてまで、会社第一主義の生活をさせるためには、そのことを可能にするための社会的諸装置というものがあつたに違いないのである。次に、それらの社会的装置がどのようなものであつたのかを検討することにしよう。

(以下次号につづく)

註

- (1) アダム・スミス『諸国民の富(一)』大内兵衛・松川七郎訳、岩波文庫、1987(第32刷)年、150頁。
- (2) 同上、151頁。
- (3) 同上、155～156頁。
- (4) カール・マルクス『賃労働と資本』村田陽一訳、国民文庫、1974(第35刷)年、30～31頁。
- (5) 同上、13頁。
- (6) 同上、31頁。
- (7) 同上、31～32頁。
- (8) カール・マルクス『資本論2』新日本出版社、1991(13刷)年、316頁。
- (9) 同上。
- (10) 同上、316～317頁。

- (11) 同上, 316～317頁。
- (12) 同上, 300頁。
- (13) 同上, 301～302頁。
- (14) カール・マルクス・フリードリッヒ・エンゲルス『新版ドイツ・イデオロギー』花崎皋平訳, 合同出版, 1974 (12刷) 年, 138頁。
- (15) 同上。
- (16) 同上, 139頁。
- (17) 同上, 140～141頁。
- (18) 同上, 139頁。
- (19) 同上。
- (20) 同上, 146頁。
- (21) 同上, 147～148頁。
- (22) 『有賀喜左衛門著作集VI』未来社, 1967年, 339頁。
- (23) 同上。
- (24) 同上, 205～206頁。
- (25) 同上, 282～283頁。
- (26) 同上, 282頁。
- (27) 同上, 70頁。
- (28) 同上, 66頁。
- (29) 同上, 68～70頁。
- (30) 同上, 70頁。
- (31) 同上, 206頁。
- (32) 同上, 207頁。
- (33) 同上。
- (34) 同上, 208～209頁。
- (35) 三戸公『会社ってなんだー日本人が一生を過ごす『家』ー』文真堂選書, 1991年, 130頁。
- (36) 同上。
- (37) 同上, 131頁。
- (38) 岩田龍子氏は, この点を日本の経営の第一義的特質であると指摘していた。詳しくは, 氏の著作である『日本の経営組織—企業の一員となるとは—』講談社現代新書, 1985年を参照のこと。
- (39) 『赤旗』記事 (1998年4月11日付け)。
- (40) 坂上肇『こんな社員はクビになる』青年書館, 1974年, 98頁。
- (41) 同上。
- (42) 同上, 99頁。
- (43) 同上。
- (44) 同上, 224頁。
- (45) 同上。
- (46) 同上。
- (47) 同上, 225頁。
- (48) 『朝日新聞・土曜版』・「サザエさんをさがして」(2006年2月25日付)。
- (49) 同上。
- (50) 同上。
- (51) 岩田龍子, 前掲書, 42頁。
- (52) 同上, 43頁。
- (53) 同上。
- (54) 金児暁嗣・結城雅樹『文化行動の社会心理学—文化を生きる人間のこころと行動—』北大路書房, 2005年, 27頁。

- (55) 同上。
(56) 同上。蛇足と思われるが、引用文にある内田は、本稿の著者ではない。京都大学の内田由紀子氏(引用文献による)である。
(57) 同上。
(58) 同上。

The Sociology of Emotional Communication and the Modern Societies (8)

UCHIDA, Tsukasa

One of features of our life style in the modern societies is that we live in the way of life in which reason is dissociated from the emotional life and is contrasted with it. And we have also given a big importance on reason, but on the other hand we have neglected an important significance of the emotional life.

In modern market societies in which we have lived, we have had to adapt ourselves to the rationalized social life in which the principles of modern rational and economized social life, like maximal profit by minimal cost, optimization, efficiency, and possibility of calculation, have been supreme ones. In such economized way of social life in the market societies, we have to treat the world outside us and ourselves as a means and instrumentally with the emotion (account) of profit and loss to attain ourselves ends, whether we wanted to or not.

In such social life, we have seen only intelligence as reason, but in the other hand, we have made emotions belong to the second and subordinate place, by seeing them as disturbing our rational activities and being irrational things. However, such very social life style seems to have suppressed our emotional life and have raised a lot of emotional problems that we don't know how to solve, not only in our individual minds but also in our social world.

I am going to analysis social conditions and our social life style which have raised such emotional problems, from the point of view of emotional communication in a series of articles. In this article, I intend to treat the way of people's working life and it's influences on their mental life. (to be continued)

Key Words: emotional communication, sympathy, the emotion (or account) of profit and loss, suspicious communication, arrogance and resentment, love

(うちだ つかさ 本学人文学部教授 生活構造論専攻)